

民。内助之德自古有加。記曰。上老老而民興孝。是之謂也。若夫擴充之。則三州之民皆安也。余冀其子孫相和。感戴仁惠如斯其篤。而色養益不懈。使叟永保其天年矣。吾聞清仁皇帝開千叟宴于乾清宮。朝官以下至近畿之民。至者七百三十人。民至今德而稱之。乃知清晏之世尙齒之舉。不獨於鄉黨也。亦達於朝廷矣。老々之政下及黎庶。而洽海之內外焉。

天保十五年歲在焉逢執徐正陽之月

賀藩親衛校尉兼領海防準備副使津田鳳卿邦儀父題于

賓月樓上

或曰。南齋は龜田中興の祖にして、舊藩十一世參議中將治修卿監太梁公、越中古國府勝興寺より遷俗して世子に立ち給ふ時、縁故の事ありて取立てられ、町年寄の家柄に加へられて、初めて町年寄と成り、家の中興をなしたりとぞ。

○額谷屋齋邸

額谷屋は河南町の舊家にて、世々酢造を商業とす。金澤市中に酢造の店多しといへども、額谷屋の酢を最上とし、そ

の名品を梅の露と稱す。數代連綿せし處、明治廢藩置縣の後零落して、家屋を賣却し、遂に退去せり。

○額谷屋小路

額谷屋の横なる小路をば、額谷屋小路と呼べり。此の小路の傍に額谷屋齋邸の土藏あり。此の土藏は即ち酢造の藏にて、此の藏酢造に能く適するゆゑにや、その製甚だ宜しきよしいひ傳へたり。

○額谷屋酢藏傳話

舊傳に云ふ。昔額谷屋の酢藏に變異の事折々ありて、名高き祈禱者に祈禱を乞ひけるといへども、其の驗を得ず。變化の怪異ます。甚だ敷成りしゆゑに、其の頃名高き劍術家なる齋藤金平に其の由を語りけるに、金平變異の頭末を聞糺し、何れ藏に至り、化生の者を見届くべしとて、平常稽古方に用ふる居合刀を携へ來り、或夜藏に入り、唯一人伺ひ居けるに、頓て彼の化生のもの出でたるを恙なく仕留めたり。年歴たる狸にて見事に伐たれ居たり。稽古刀にて如此見事に切りたるは、誠に手練の所とはいひながら、眞劍を指置き、稽古刀を携へ入りたるは如何と尋ぬる人あり

しに、されば庫中の容子狐狸の所業なる事顯然たり。然るに眞劍を帶するは如何と、態と稽古刀を用ひしよし、金平答へたりとぞ。先是火葬場へ狼出づる沙汰を聞き、齋藤の弟子眞劍を帶し、夜中伏し居り、伐りけるといへども伐り得ざりけり。金平云ふ。都て獸を伐るには我が足に喰付くを相圖となし、獸の足を伐るべし。左なくては仕留め難きもの也といへりと云ひ傳へたり。

○道願屋齋邸

道願屋は、河南町にての舊家にて、往昔は橋爪東側數間の家屋、皆その齋邸なり。道願屋の生菓子と稱し、殊に名高き菓子店にて、世々富饒なりしかど、寛政の頃零落して商店を廢し、貨屋を以て子孫僅かに活計を立てたりとぞ。

○道願屋木端傳話

咄隨筆に云ふ。道願屋木端は富貴人に越えて、心ばせもきたなからず。婢・子どもをも取立て、能く身代に有付きて、其の身河原町に隠居せり。武家町方ともに懇にして、魚鳥其の外珍敷物は先づ木端の所へぞ集りけるに、珍物共料理して其の身は喰ふとも人には喰へともいはず。又何者にて

も寄集りて喰ふはかまはず。雁・龜・鱒などにても、是を私料理してたべ可申など、いうて、料理すればかまはず。其の身文首にもなく、若し金銀をかしたる者衰へて返済せざれば、借す時より取るべきとはおもはずというて、二度いひも出さず有りけり。是眞實の慈悲心なるべし。享保十一年の秋より木端煩ひけり。鳩杖の年も過ぎたる老人なれば、次第々々によわり行き、出入する町人ども伽にゆきて物語などするに、碁・將・茶・湯・連排などの咄しすれば氣に入らず。もはや歸られ候へというに依りて、假初の咄にも利潤の事をいへば、夜の更くるをも知らず物語する也。是は木端方へ出入する中買連の者に不似合咄し、無用の仕形とおもふゆゑならん。或時鹽屋清右衛門といふ中買、伽の席にて、私は銀をため度と存じ、いろ／＼才覚も仕り、身をも詰候へば五貫自程は銀をため候へども、又損を仕り、元の如く成る。何とも金銀の集るやう御座候はゞ、御指南下され候へといふ。木端が曰く、夫れ程に心懸候はゞ、少しは銀もたまるべし。大き成る身軀には成りがたし。先づ一門一家或は懇なる者の衰へたるを助け、たすけて後こ